

音表現から音楽表現へ

—ブームワッカーを用いての実践的な取り組み—

Sound Presentation Change into Music Expression : Practical Experience Playing the Boomwhackers

芹澤 美奈子

Minako SERIZAWA

1. はじめに

幼稚園教育要領は、平成29年に告示、改訂となった。そのうち、保育内容の5領域の中にある「表現」には、以下のような記載がある。¹⁾

(感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする)

1 ねらい

- (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
- (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

2 内容

- (1) 生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。
- (2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
- (3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
- (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。
- (5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
- (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
- (7) かいたり、つくったりなどすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。
- (8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

以上示したねらい及び内容は、平成元年に告示されたものからほとんど文言は変わっていない。平成元年以前の旧

6領域とは異なり、音楽表現、造形表現、身体表現などが切り離されず、緩やかにつながったものとして示され、子どもがそのような未分化な表しの中で、自分なりに考えたり、感じたことを表現することが重要視されている。

音楽表現に関する内容としては、(1)、(4)、(6)が該当するが、旧6領域とは違い、「音」についての記載が2箇所あり、続いて「音楽」に関する記載が1箇所続いている。

つまり、「音楽」という文化として確立したもの以前の曖昧で混沌とした音楽表現を認め、保育者が気づき、受け止めることが大事であると考えられているといえよう。

しかしながら、音楽表現が、どのように音楽表現へ移っていくのか、そこに保育者はどのように関わっていけばよいのかという、音から音楽への保育内容のあり方については、依然研究がされつくしたとは言えない状況にある。

本論文では、子どもが実際にブームワッカーを媒介にして音と主体的に関わり、イメージを伝え合いながら音楽表現へ高めていった実践的な取り組みを挙げていく。その中で、音と音楽との繋がり、そこへの保育者としての役割について考えていきたい。

2. ブームワッカーとは

ブームワッカー (Boomwhackers) は、1995年にアメリカ合衆国で作られ、プラスチック製の筒状の楽器で、筒の長さにより音が変わるものである。日本では、「ドレミパイプ」という商品名で製造されたこともある。筒が長ければ長い程、音は低く、徐々に短くなることによって音の高さが変わり、ドレミファソラシドの音になる。1本1本、違う色になっており、筒の胴体には、例えば「ド」の音であれば、「C」「ど」などと印字がされており、幼い子どもでも読めるよう配慮されている。叩くと音がする打楽器である。また、筒の片方を専属の蓋で閉じると1オクターブ下がるという特徴をもっている。演奏する際には、片手に1本持ち、その上で、腿や手のひら、床、机などを叩いて演奏するため、一人で複数持って演奏することは困難で

〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 鶴見大学短期大学部保育科

Department of Early Childhood Care and Education, Tsurumi University of Junior College, 2-1-3 Tsurumi, Tsurumi-ku, Yokohama 230-8501, Japan.

ある。原則として一人1本を担当し、複数人で演奏しなければならない。よって、幼児と実践する際には、一人が1本ずつ持ち、音を出し、自分なりにいい音を出せるように試行錯誤したり、複数人でやりたいことを伝え合いながらメロディを創り上げていくことが期待されている。

3. 「音」と「音楽」

音 (Sound) は「音、音響」のことである。ここには、リズム、メロディ、ハーモニーはなく、生活の中の全てが音とされている。風の音や、雨の音、車の走っていく音、バッグのファスナーの開け締めなども含まれている。

音楽 (Music) は、「リズム」「メロディ」「ハーモニー」の三要素からなったものであり、美術やバレエのように文化として確立されたものと考えられる。

リズム (rhythm) は、律動とも言い換えられ、音の長短や強弱の時間的な組み合わせを意味する。メロディ (melody) は、旋律とも言い換えられ、音の高低の時間的な組み合わせを意味する。ハーモニー (harmony) は、和声とも言い換えられ、違う高さの2つ以上の音の、同時的な組み合わせによってできる和音のつながりである。

ジョン・ケージ (John Milton Cage Jr. 1912~1992) の作品「4分33秒」は、楽譜上に以下のように書いている。

第1楽章 T A C E T (休み)

第2楽章 T A C E T (休み)

第3楽章 T A C E T (休み)

すなわち、演奏者は、4分33秒もの間、音一つ鳴らしてはいけないのである。4分33秒の間は、観客のしわぶきの音、椅子が軋む音などを「演奏し」終わるのである。この曲は、観客の出した音をリズム、メロディ、ハーモニーと、ケージは解釈し、発信しているのである。

音楽は、意図的に作られた音の集合体であり、その時その場で、一人であれ、複数人であれ、表現し創り上げていくものであると考える。

音 (Sound) があらゆる素材を包括している一方で、音楽 (Music) はリズム、メロディ、ハーモニーを必要としており、音よりもある種の厳格さを備えていることがわかる。

4. 保育の計画及び実践方法

実践日：2017年11月7日 10時～

場所：S県F幼稚園

対象：5歳児11名 4歳児4名

ブームワッカーの存在を知らず、初めて触れる子どもを対象に保育の実践を行った。固定したビデオカメラ1台と、他の保育者が持つ移動式ビデオカメラで撮影し、筆者の身体にはICレコーダーを装着した。

5. 結果及び考察

(1) 子どもの遊びの展開 (事例)

前述した通り、ブームワッカーを見たことがない子ども

が対象だったため、1本のブームワッカー (以下、棒と表現する) を新聞紙で包み用意した。

筆者の周りには自分の椅子を思い思いに並べた子どもたち15名が座った。筆者が、「ちょっとね、見せたいものがある。」と言うと、子どもたちは一斉に注目したが、A男 (5歳児) が、「会議には新聞紙が必要だよ。」と発言した。これは、まだ新聞紙の中身が何かまでは考えておらず、「読む」ための新聞紙であるという認識でいたと思われる。

この後、新聞紙を開き、棒を出すと、一斉に「何それ。」「見たことない。」という発言が飛び出し、内、C男 (5歳児) が、「あ、待ってこれ。」と棒を口に近づけ、吹き出した。しかしながら、当然音は出ない。それを受けてA男が「これ、楽器じゃないの?」「それしかありえないよ。」と言い、A子 (4歳児) が、「それにね、ミって書いてある。」と発言した。筆者が、「本当だ、ドレミって書いてある。」と応じると、B男 (5歳児) が、「吹いてみる。」と言いながら、棒に口をつけ、「あー。」と言いながら吹いた。筆者が「あー、って自分で言うの?」と問うと、突然A男が棒をもって、椅子を叩いた。

筆者がすかさず「あ!もう一度!」という、A男が再び椅子を叩いた。それを見ていたA子が、椅子に向かって連打すると、B子 (5歳児) が、「ああ、した。ミにしか聞こえない。」とつぶやいた。

筆者が、「じゃあさ、この他に何が必要?」と聞くと、A男が「ドレミファソー。」とメロディをつぶやいた。「おお、すごい、綺麗な声!」と答えると、A男が指で数えながら「ドレミファミレド」と、『かえるの合唱』の階名唱を始めた。この時、A男の中では、既に、棒は楽器であり、音楽の演奏ができるというイメージができており、音楽表現への見通しを持っていたと考えられる。

筆者が、「ドレミファソラシドを探してみましよう。」と、歌うように言い、他の棒を出し始めると、15人の子どもたち全員が棒を取りに来た。

しかし、ここで子どもの認識が分かれた。5歳児の子どもたちが、「一人一本。」と言いつつ、4歳児は、一人3、4本持つなど、自分で持てる限りの棒を抱きしめたのである。4歳児は、棒では、一人が複数持たないと演奏できないと認識していたと考えられる。

そこで、D男 (5歳児) が、「ねえ、なんでみんなそんなに持つ?」と怒り、筆者が「Aちゃん、そんなに持たないで。」と声をかけ、全員一人1本持ったのを確認し、一人一人に直径50センチほどの絨毯を配った。子どもたちは、各自、自分の棒を絨毯に向かい、連打し始めた。

連打の方法も、様々であり、強く叩きつけたり、逆にできる限り小さく音を鳴らしたりする姿が見られた。また、叩きながら、耳を絨毯につけ、音を聴いたり、自分の身体の一部を叩き、音の違いを確かめたりする様子もうかがえた。ここでは、子どもたちがそれぞれ個人個人で音を味わっており、他の子どもとのやり取りはうかがえない。また、自分が音階の中のどの音を叩いているのかも、具体的

には理解していない子どもがほとんどで、自分の持っている棒の音そのものを確かめ、味わっている。ここに、幼稚園教育要領で謳われている「音に触れ」「自分なりの表現」が生み出されていると考えられるのである。

このような活動の後、筆者が各自の絨毯を移動させ、みんなで輪の形になるよう提言した。この際、ドレミファソラシドの順番で並ぶように意識し、子どもたちに伝えた。その上で、前述したように、音階のイメージができていたA男に対して、「ねえ、A男くん、ドレミファソって、みんなでやりたいの？」と聞くと、「うん。」とA男は答え、続いてA子、B子、D子（5歳児）が順番にやりたい、と言い出した。A男が「みんな、ストップ。」と叫ぶと、D子が「ドレミファソ」と、一人ひとりを指さしはじめ、A男は、A子のところへ行き、「あの子が叩いたら、叩いて。」と言った。これは、5歳児のA男が、4歳児のA子に対して、自分たちがやりたいことを易しく教えている姿であり、口調も優しいものであった。

D子が「はじめますよー。」、A男が「おーーーい、ストップ。」と全員に声をかけ、一人ひとりが順番に叩き、ドレミファソラシドが完成すると、「わー。」という拍手が生まれた。

ここから再び、各自の思い思いの連打が始まったが、D子が「もう一回始めます。」と呼びかけ、順番に演奏すると、ラの音で止まってしまった。ラの音を担当していたA子が、ラを2回叩くが、シを担当していたE子（4歳児）が後に続かない。B男が「ちゃんとやらなきゃ。」と言うと、A男がA子のところに再び行き、「あのね、あの子が叩いたら、叩くの。」と教えた。しかしながら、A子は間違えた「シ」担当ではなく、「ラ」担当である。A子はここで、「わかっているもん。」と若干怒り気味にA男に言い返した。

再び、ドレミファソラシドが完成されると、ほっとした雰囲気になり、A男は、達成できた喜びから、「最高！」とにこやかにつぶやいた。

A男は、続けて「ねえ、待って、みんな待って、ドレミファミレド（かえるの合唱）やらない？」と言い出した。筆者が「え？そんな難しいことやるの？」と問いかけると、「僕がドを叩く。」と言い、D子が「A男くんがドを1回叩くから。」と答えた。この時、A男もD子も共通のイメージが出来上がっていたと思われる。

A男が再びA子のところへ行き、「この子が叩いたら1回やって。」と優しく言うと、A子は「わかっているってば。」と強い口調で答えた。すなわち、A子にも、『かえるの合唱』を演奏するという共通のイメージが出来ていたと考えられる。筆者は、A男に対し、「A男くん、A子ちゃんは分かっているよ。」と声をかけた。

A男が自分の絨毯に戻り、B子に「僕が1回叩いたらやって。」と頼むと、それを聞いていたC男が、「僕はー？3回やんの？」と言った。A男、B子、D子、A子の中では理解されていることが、C男には伝わっておらず、C男はこれから何をやるようとしているのかがイメージ出来ていなかった

たことがうかがえる。

B子、D子が「はじめよう。」と言うと、A男は、「ああ、もう！」と耳をふさぎ、「静かに。」「静かになったら。」とつぶやいた。A男は、音楽は静寂があるからこそ成り立つものであり、静かな環境から音楽表現は始まるということを直感的に感じていたと考えられる。

A男が棒を指揮棒のようにもって、「静かになったら始める。おい、そこ、静かに。」と問いかけると、C男は「自分だって静かになれ。」と言い返した。たしかに、A男は「静かに。」とみんなに訴えているが、A男自身の声が大きく、C男はそれを受けて発言したのだと考える。

ようやく、音を鳴らす環境が整ったので、筆者は子ども達が棒を叩く際に、「ドレミファミレド ミファソラソファミ ドドドドドレミミファファミレド」と階名唱で今鳴らすべき音を伝えていった。この演奏は完成し、全員が拍手している。すなわち、この時に、バラバラだった全員のイメージが共有でき、音楽表現に移行したのだと考えられる。

続いてD子が、「ソソソソソミミミ ソソファレド」と歌い始めた。これは『ジングルベル』である。D子は、全員に「やろうよ。」と声をかけた。すると、B子が、「ミミミミミ ミソドレミ」と返した。このB子がつぶやいた歌は、D子の歌の前半部分にあたる。B子とD子の間で共通の理解が深まったと考えられる。B子が、再び「ミミミミミ ミソドレミ」と大声で歌うと、それに合わせ、全員が音を鳴らし始めた。筆者が続けて「ミレドレーソ」と歌うと、B子が「違う。ソソファレド、だよ。」と言った。筆者は、『ジングルベル』の全曲を演奏するのだと認識していたが、B子が、歌の途中を省略して考えており、ここで、B子の思いと筆者のイメージのずれが生じた。

この後、5歳児のみが全員で『ジングルベル』を階名唱しながら4歳児も交えて叩き、演奏をし、D子の「できたー。」というつぶやきと、全員の満足そうな表情で一旦活動が途絶えた。子ども達にある程度の達成感が生まれたと考えられる。

そのため、筆者はB4サイズの亚克力板を出し、「みんな、すごいのができたね。あのね、今日は先生が持ってきたものがあってね、こういうのなんだけど、ここに絵を描くことができるの。絵を描いてもいいし、何かを貼っても構わないんだけど、できたら先生がまとめてあげる。そしたら、ポンっていい音がでると思うから。」と問いかけると、C男が「やりたい、やりたい。」と両手を出してきた。全員が取りに来、テーブルに着席し、油性マジックで各々絵を描いていった。

覗き込むと、D子が「見ないで、これ見ないで。」と隠しながら描いたり、A男は、「これ、木、森、草むら。」と描きながらつぶやく姿が見られた。また、B男の「びーーー。」というリズムカルな言葉も生まれた。各自、描くことに没頭していたが、筆者が出来上がった作品を丸め、透明なテープで張り付け棒を仕上げると、徐々に子ども達は自分の絨毯に帰り、叩いて音を確かめ、感じるようになって

という発想が生まれたため、そこで筆者は一緒に口ずさむという配慮をした。また、実際に演奏する時には、子どもたちが音を叩くことだけで精一杯だったため、筆者は、階名唱で応援をするということを行った。

一方で、子どもたちからは、『かえるの合唱』、『ジングルベル』の曲を演奏したい、というアイデアが生まれ、それを演奏したが、これら2曲は、ドレミファソラシド全ての音が出てくる曲ではない。つまり、自分の演奏の順番が来なく、見ているだけの子どもがいたのである。保育者としては、このような場面を想定し、ドレミファソラシド全てが出てくる曲、例えば『どんぐりころころ』『小鳥のうた』『大きな栗の木の下で』などを演奏することを提案すべきだったと考える。

また、最後の段階で、A男が手作りのブームワッカーを叩き、「これ、ラ？」とつぶやき、本当に「ラ」の音であると分かった時に、積極的に関わり、気付きを受け止める、ということには行っていなかった。A男の発見を受け止め、共に楽しんだり、他の子どもたちに、A男の発見を伝え、共有するなどの配慮も必要であったと考える。

さらに、5歳児のA男、B子、D子、4歳児のA子は、棒がメロディを奏でるものであり、全員で音を鳴らさなければ音楽にならないと理解し、全員のリーダー的存在として表現を高めていったが、C男など、何人かの子どもは見通しをもてずに、自分の棒をひたすら連打して音を感じるという姿がみられた。つまり、音表現にとどまっておらず、音楽表現には届いていない。音表現をしている子ども、音楽表現を味わおうとしている子どもがいた場合、どのように保育者が関わっていったらよいのか。必要なのは、音楽表現に高めていくことを急ぐのではなく、十分に音に関わり、音を鳴らす気持ちよさ、鳴る音を聴いて心地よいと思えるように、援助していくことである。その上で、音楽表現に高めていけることを期待しながら見通しを持った保育をしていくことが重要ではないであろうか。

6. まとめ

音表現から音楽表現へどのように高まっていくのか、保育者としてどのように関わっていけば良いのかについて述べてきた。

高山(2019)は、「元来、人間は生まれながらにして『音楽』を獲得しているのであろうか。獲得しているとすれば教育は不要であるが、文化が『個性の重なり合いでできる』とするならば、生後何らかの文化的営みによって育まれる²⁾とし、子どもの音楽表現は、突然生まれるのではなく、「音楽」という文化的背景を念頭におきながら、大人がある程度の仕掛けも考慮しつつ、子どもに発信していくことで育まれるとしている。つまり、子どもが「音」の世界を十分に味わいながら、他者とのやり取りを行い、その共有する喜びを感じながら音楽表現に高めていくことが重要であると考えているのである。

今回の子どもたちの活動は、以下の流れだったと考える。

1. 素材に出会う、発見する

ブームワッカーが新聞紙の中から出てきた時に、興味を持ち、関わろうとする。何の為に棒なのか、考えようとする。

2. 試す、試行錯誤する

どうやって使うのか、実際に手に持ちながら試す。音が鳴る楽器なのであると認識してからは、どうやればいい音が鳴るのかを様々な方法で試す、試行錯誤する。

3. イメージをし、ふくらませる

ドレミファソラシドを順番に鳴らし、音楽が奏でられるのだと発見してから、『かえるの合唱』や『ジングルベル』を演奏しようとする。

4. みんなで共有する

『かえるの合唱』、『ジングルベル』を実際に演奏し、みんなで楽しむ。

このうち、1の素材に出会う、発見する、2の試す、試行錯誤する、までは音表現の世界であり、3のイメージをし、ふくらませる、4のみんなで共有するは、音楽表現であったと考える。

イメージの共有ができず、音表現そのものを楽しんでいる姿も何人の子どもからは見受けられたが、大切なのは、音楽表現に高めていくことが保育の最終目標ではなく、音そのものを感じ、受け止め、自分なりに表現をして楽しむことが重要である。

すなわち、武藤(2016)が、「子どもの内に備えられた音のイメージが音楽表現の創造につながり、音をいかに表現するかを試行錯誤する体験が、楽音(楽器音や歌声)の質感を見だしていくことにつながる⁴⁾」というように、楽器音を子どもが敏感に受けとめ、それを試行錯誤しながら音と向かい合い、そこで蓄積された様々な音のイメージや楽器の音の魅力を伝え合ったり、他者と音楽を作っていく喜びを味わう体験を十分に行うことが必要であると考えられる。

幼稚園教育要領の保育内容領域「表現」にあるように、子どもは雨の音や風の音など自然の中にある音や身の回りの様々な音に気付き、味わい、それを自分のものとして表に表していく。これら姿は音表現であるが、子ども達がこうした混沌とした未分化な状態の表しを十分に行い、保育者はそれに気づき、子どもの思いを受け止める。武藤(2016)が「特定の音を、たとえば心地よさをもたらすからということで再現しようとするれば、それは音楽の始まりとしての音単体の魅力をつくり出す。多種多様な音の世界がそこには生まれており、それを音として味わうという姿勢が音楽へとつながるのである。」³⁾というように、この音表現を十分に経験すると同時に、リズム、メロディ、ハーモニーからなる音楽表現に導いていくという方向性も重要である。

今回の保育の展開は一つの試みに過ぎない。

子どもが音と主体的に出会い、取り組めるよう、保育者は音の素材を用意し、十分な環境を作ることが大切である。今回の音表現から音楽表現への展開は、A男、B子、D子、A子がいたからこそ成り立ったといえる。これらの子ども

リズムカルな言葉☆ 動き言葉の融合● 言葉と音の融合◎ イメージに基づく表現◇
 描画、制作などを媒介とした表現■ 動きのみの表現○ 音と動きの表現□

表現形態	子どもの動き	保護者の反応
◎●	<p>A男 会議には新聞紙が必要だよ。なにそれ。</p> <p>B男 見たことない。</p> <p>C男 あ、待ってこれ。 (ブームワッカーに口をつけ吹く。)</p> <p>A男 これ楽器じゃないの？</p> <p>A男 それしかありえないよ。</p> <p>A子 あー、それにね、ミって書いてる。</p> <p>B男 吹いてみる。</p> <p>B子 自分でミーて言うと疲れちゃう。</p> <p>□ ○A男 (棒を持ち、椅子を叩く。)</p> <p>□ A男 (棒を持ち、再び椅子を叩く。)</p> <p>□ ○A子 (椅子に向かって連打する。)</p> <p>B子 ああ、した。ミに聞こえない。</p> <p>☆ A男 ドレミファソー。</p> <p>● A男 ねえ (指を数えながら) ドドツソララソ</p> <p>(全員棒を取りに来る。)</p> <p>B男 ねえ、一人一本？</p> <p>保育者の言葉に対しての反応はなし。</p> <p>A子 (両手を出し) ないないない！</p>	<p>ちょっとね、みんなに見せたいものがある。開けちゃっていい？</p> <p>見たことある？</p> <p>(新聞紙からブームワッカーを取り出す。)</p> <p>何に使うんだと思う？</p> <p>(C男を見て) あ！</p> <p>そう思う？</p> <p>ああ、本当だ、ドレミって書いてある。</p> <p>ドレミのミに似ている？</p> <p>じゃあ、これは楽器だってこと？</p> <p>あー、って、自分で言って吹くの？</p> <p>あ！もう一度！</p> <p>ああ、音したね。</p> <p>じゃあさ、この他に何が必要？</p> <p>おおすごい。きれいな声！</p> <p>(歌うように) じゃあ、ドレミファソラシドを探してみましよう〜。</p> <p>一本ずつ？じゃあみんな何がほしいかな。全部出しちゃおうか。</p> <p>ねえ、一つだけお約束して。これ、頭を叩くの痛いでしょ。絶対叩かないでね。</p> <p>じゃあね、一人一本ね。 (50センチ四方の絨毯を配る。)</p>

表現形態	子どもの動き	保護者の反応
●	B男 バシ、バシ ドドドドド	
◎●	A子（絨毯の上に棒の先端が来るようにし、何度も叩き、いい音が出る場所を探している。）いいね。	
□	C男（2本持ち、両手で叩く。）	
	D男 ねえ、なんでみんなそんなに持つの？	
☆	E男 ミレレレレ	
	（A子が3本棒を持っている。）	
	（15人全員輪になって座る。）	
	A男ねえ、ここ（絨毯）にこれ（棒）置いていって。	
◎●	（多くの子どもは、連打して遊んでいる。）	
	C男 ポンって音。	
	A男 そう。	
	A子、B子、D子 うん。	
	A男 みんなストップ。ストップ。	
●	D子、ドレミファソ（一人ずつ指を指す。）	
	E子（3本持っている。）	
◎	A男、D子がA子の所に行く。	
	あの子が叩いたら、叩いて。（A子が3本持っていたが、2本返してもらう）	
	A男 待って、低いシが欲しい。	
☆	D子 はじめますよーーー。	
☆	A男 おーーーい、ストップ。	
□	（一人ひとり順番に鳴らし、ドレミファソラシドが完成する。）（保育者も含め、全員で拍手。）	
□	（再び多くの子どもたちが連打を始める。）	
	D子 みんな、もう一回始めます。	
□	（演奏するが、ラ（A子の担当）で止まる。）	
	（A子はもう一度叩くが、シ担当のE子が音を出さない。）	
	B男 ちゃんとやらなきゃ。	
	A男（再びA子の所へ行き）あのね、あの子が叩いたら、叩くの。	
	A子 わかっているもん。	

表現形態	子どもの動き	保護者の反応
◎□	D子 A男くん、はじめるよ。 全員でドシラソファミレドを完成させる。	あ、うまくいったよ。
☆◇	A男 最高！ A男 ねえ、待って、みんな待って。 ドレミファミレドやらない？	え？そんな難しいことやるの？
◎	A男 僕がドを叩くから。 D子 A男くんがドを1回叩くから。 A男 (立ち上がり、A子の方へ) この子が叩いたら1回やって。 A子 わかっているってば。	A男くん、A子ちゃんはわかっているよ。
☆◇	A男 ドレミファミレド ミファソラソファミ (B子に) 僕が1回叩いたらやって。	
◇	C男 僕はー？3回やんの？	
◇	A男 1回だってば。	
◇	B子 はじめよー。	
◇	D子 はじめるよー。	
◇	A男 (耳をふさいで) ああ、もう！	
◇	B子 はじめるよ。	
	A男 静かに。	
	B子 やるよ。	
	A男 静かになったら。	
	(自由に叩いている子どもが沢山いる。)	
	A男 (棒を指揮棒のように使って)	
	静かになったらはじめる。おい、そこ、静かに。	
	C男 自分だって静かになれ。	
	D子 早く、A男くん。	
◇□	(歌に合わせ、叩く。)	じゃあ、先生歌うわ。
		ドレミファミレド ミファソラソファミ
		ドドドド ドドレレミミファファミレド
○	C子 できたー。 (全員拍手する。)	
☆	D子 ソソソソソミミミ ソソファレド	
□		次、それやるの？
	D子 うん。やろうよ。	
□	B子 ミミミミミミ ミソドレミ	
□	(全員B子の声に合わせて、棒を叩く。)	
		ミレレドレソ
☆◇	B子 違う。ソソファレド、だよ。	
		あ、そっちなか。

表現形態	子どもの動き	保護者の反応
<p>☆◇</p> <p>◇☆</p> <p>◎◇□</p> <p>■</p> <p>■</p> <p>■☆</p> <p>■</p> <p>■</p> <p>●</p> <p>☆</p> <p>◎◇□</p>	<p>(5歳児のみ) ミミミミミミ ミソドレミ ファファ ファファファミミミ ソソファレド</p> <p>D子 ねえ、B子ちゃん、やって。(みんなに) ねえ、はじめるよー。</p> <p>(全員で) ミミミミミミ ミソドレミ ファファファ ファファミミミ ソソファレド</p> <p>D子 できたー。</p> <p>C男 やりたいやりたい。</p> <p>(全員、絵を描き始める。)</p> <p>D子 見ないで、これ、見ないで。</p> <p>A男 これ、木、森。草むら。</p> <p>B男 びーーーー。ヤッホー。</p> <p>A子 クレヨンは？</p> <p>B子 ウサギ描かないと。</p> <p>※各自、絵を描くことに没頭する。</p> <p>C男 やった、できた。</p> <p>E子 (手作りの棒を持って、片方の手を叩く)</p> <p>B男 キュッキュ (各自絨毯に戻り、手作りの棒を打ち始める。)</p> <p>D子 いい音するよ。</p> <p>B子 いい音だね。</p> <p>C男 ポンって音がするからね。</p> <p>A男 ねえ、これ、ラ？これ、ラ？(ブームワッカー のラと、手作りの棒を見比べる) ラだね。</p>	<p>みんな、すごいのできたね。あのね、今日は先生が 持ってきたものがあったね、(袋からアクリル板を 出す) こういうのなんだけど、ここに、絵を描くこ とができるの。絵を描いてもいいし、何かを貼っ ても構わないけど、できたら先生が丸めてあげる。そ うしたら、ポンっていい音が出ると思うから。</p> <p>A子ちゃん、クレヨンでは描けないの。</p> <p>出来た人は持ってきて。テープ貼るよ。 (順番に、アクリル板を丸め、テープを貼っていく。)</p> <p>すごい、よくわかったね。</p>

のような音楽への気付きがなかった場合、保育者としてどのように関わっていったらよいのか、また、自然のあらゆる音をきっかけとした音表現をどのように音楽表現に導いていくかが、今後の課題である。

【引用・参考文献】

- (1) 『幼稚園教育要領』2017 フレーベル館 p.21～22
- (2) 高山仁 「『音』が『音楽』になる、その過程で育つ『文化力』についての考察－重い障がいをもつ子どもとの関わりから音楽教育の可能性を探る－」2019 日本音楽教育学会第50回東京大会プログラム p.59
- (3) 武藤隆監修 『子どもの音感受の世界 心の耳を育む 音感受教育による保育内容「表現」の探求』2016 萌文書林 p.21
- (4) 同書 p.6